

---

# 正々堂々と

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正々堂々と

### 【Nコード】

N2208S

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

長沙に入った関羽。その前に立ちはだかる老将黄忠。二人が一騎打ちの中で御互いに見せあったものは。三国志的一幕を書いてみました。

## 第一章

正々堂々と

赤壁の戦いの後でだ。劉備は動きはじめた。

その己がいる荊州南部の平定にかかってだ。その一群である長沙にも兵を送った。

それを率いるのは途方もない大柄で見事な髭を持つ男だった。赤い馬に乗り有り得ないまでに大きな刃を持つその男がだ。左右に控える二人に声をかけられていた。

「では義父上」

「今よりですな」

「うむ、長沙を攻める」

その男関羽雲長がだ。右にいる白面の若者である養子関平と左にいる大柄な髭の男周倉に対して述べるのだった。

「これよりな」

「わかりました」

「では我等も」

「さて、その長沙だが」

関羽自身が言うのだった。切れ長の見事な目であり顔は赤い。その赤さがその髭とあいまって非常に目立つ。貴相であった。

「太守は韓玄だったな」

「はい、小心で欲深い男です」

「たかが知れています」

関平と周倉が彼に答える。

「ですから攻めればです」

「何ともありません」

「そうか。ではこの戦いはすぐに終わるか」

「はい、そう思いますが」

「その男は造作もない男ですが」

「ここだ。二人の言葉が変わってきた。

「あの場所には黄忠殿がおられます」

「御存知でしょうか」

「何度か会ったことがあったか」

「関羽は己の記憶を辿った。主であり義兄である劉備がこの荊州に身を寄せてからのことをだ。そのうえでこう二人に話すのだった。

「宴の時にだ」

「もう六十を超えておられますがかなりの武勇の方です」

「特に弓は」

「そうだったな。わしに匹敵するだけの腕だというな」

「こう聞いていたのだ。関羽もだ。

「手強い相手か」

「ですから義父上がここを攻めることになったのかと」

「この長沙に」

「それでか」

「関羽はまさに劉備にとって第一の将であった。その彼が向けられるということやはりかなりのことであるのだ。

「だからだった。彼等も軍を進めながら話すのだった。88

「長沙の城にはすぐに着いた。そこでまずは一戦交えた。

「その戦はあっさりと終わった。関羽の武勇と指揮によりだ。彼等の勝利に終わった。

「敵はすぐに城の中に逃げ込む。しかしであった。

「関羽は追おうとはしない。そうして関平と周倉に話す。

「これからだ」

「この戦いではなくですか」

「次なのですな」

「そうだ、次だ」

「その強い声での言葉だった。長沙の城のその黄色い壁を見ている。土と砂のせいですすけた色になっており寂れたものも見られる。

「その壁を見てだ。彼は言うのだった。

「その黄忠殿が出て来るぞ」

「我等が最初に出て来た兵を破ったことで、ですか」

「それで遂に」

「韓玄は出ぬ」

関羽はこのことも確信していた。

「小心な男よ。それならばだ」

「黄忠殿がですな」

「出て来ると」

「そうだ。来るぞ」

関羽こう二人に告げて今は陣を張らせた。そうしてその彼を待つ  
のだった。

そうして一夜を過ごし次の日だった。城門が開いた。

そこからまた一軍が出て来た。その先頭にいたのは。

黒い馬に乗った白く長い髭の男だった。確かにその顔は皺だらけ  
であり歳が見られる。だが顔は精悍そのもので覇気に満ちており背  
筋もしっかりとしている。立派な鎧の上に白いマントを羽織ってい  
る。その彼が出て来て関羽達に対して言ってきたのであった。

「劉備玄德殿の軍か！」

「如何にも！」

関羽がその老将の言葉に応えた。

「その城を譲り受けに参った！」

「悪いがそうはいかん」

老将は老いを全く感じさせない大声で返してきた。

## 第二章

「若しこの城が欲しいならば」

「どうせよというのだ」

「この黄忠を倒してからにするのだ」

「ここであった。彼は己の名を名乗った。」

「そうするのだな」

「貴殿があつた黄忠殿か」

「如何にも」

関羽の言葉にも頷いてみせてきた。

「その通りよ」

「貴殿のことはわかった。それではだ」

今度は関羽の番だった。しかしだ。

黄忠からだ。こう言ってきたのである。

「関羽殿だな」

「知っていたか」

「貴殿の名は天下に轟いている」

だからだというのであつた。

「美髯公、その赤兔馬と共にな」

「知っていたか。ならば話が早い」

「この城を渡すつもりはない」

黄忠はまた関羽に告げてきた。

「若し手に入れたければだ」

「貴殿を倒せというのだな」

「如何にも。さあ、どうするのだ」

「退けと言われて退くのは武人の恥」

これが関羽の返答だった。

「それは貴殿とて知っていよう」

「では戦うというのだな」

「貴殿もそのつもりでここにいるのではないのか」

「その通りだ。それではだ」

「参る」

まずは関羽が前に出た。そして黄忠もだ。二人の一騎打ちがはじまった。

関羽はその巨大な得物を縦横に振り回す。一振りごとに風が唸り龍の如き咆哮を出す。その関羽に対して黄忠もだった。

手にしている刃を両手で振るう。それは関羽の攻撃を弾き返しそしてさらに己も繰り出す。二人の戦いは一進一退のものだった。

五十合、六十合となりやがては百合を超えた。しかし決着はつかない。

それを見てだ。関平と周倉も思わず唸る。

「義父上とあそこまで戦うとは」

「黄忠殿もやはり」

「そうですね。天下に数少ない豪傑です」

「張飛や趙雲殿と並ぶ」

どちらも劉備の下にいる天下無双の武の者達だ。その彼等にも比肩する者だと。黄忠のその武を見てそのことを認めたのである。

「義父上こそは天下第一の武の方と思っていたが」

「そうですね。黄忠殿もまた」

「恐ろしい武を持たれている」

「間違いありません」

二人も認めるしかなかった。関羽と黄忠の戦いは百合から二百合になってもまだ続いていた。そしてそれはまだ続くのだった。

両軍も見守るだけだった。誰も手出しはできない。

二人の戦いは果てしなく続くかと思われた。しかしだった。

不意にだ。黄忠の馬がつまづいてだ。転倒してしまったのだ。

それに乗っている黄忠もだった。落馬してしまい地面に背中から落ちた。それを見てだった。

「あつ、將軍！」

「これでは」

「まずいぞ」

黄忠の兵達がだ。思わず声をあげた。

「馬に乗って互角だったのだ」

「それで今落馬しては」

「相手はあの関雲長だぞ」

「勝負にならない」

「まずい」

「やられるぞ」

黄忠に死が迫っているのだ。誰もが思った。しかしだった。

関羽は動かなかった。黄忠はようやく立ち上がった。得物はもう両手にはない。だがその彼に対してこう告げたのだった。

「馬を乗り換えられよ」

「何っ」

「今の貴殿と戦うつもりはない」

己の得物を右手に持ち構えを解いての言葉だった。

「新しい馬に乗ってだ。行かれよ」

「それがしを助けるといのか」

「お互い満足のいく立場で戦ってこそ」

これが関羽の言葉だった。

「だからこそ。そうされよ」

「………わかった」

関羽の言葉に邪なものがないとわかってた。黄忠も頷いた。



### 第三章

そうしてだった。黄忠は一旦戦場から退いてだ。別の馬に乗って戻ってきた。

そのうえでまた関羽と戦う。だが夜になりだった。

「今日はこれで終わりにしよう」

「そうだな。それではだ」

「またな」

「明日こそ」

こう言い合ってた。別れるのだった。二人は夜の闇の中で別の挨拶を告げ合いそうしてこの日は戦いを終えたのだった。

関羽が陣に戻るとだった。すぐに関平と周倉に迎えられ声をかけられたのだった。

「噂以上の方ですな」

「あそこまでとは」

「そうだな」

それはだ。戦った関羽がもっともよくわかることだった。

それでだ。彼はこう二人に話すのだった。

「わしとしても戦いがいがある」

「しかしです。父上」

「何故ですか」

二人はだ。ここで怪訝な顔になって彼に言ってきた。

「あの落馬した時にです」

「何もされなかったのは」

「どうしてですか」

「まさに好機だったというのに」

「それは武人のすることではない」

「これが関羽の返答だった。

「落馬したそこを斬るのはだ」

「だからですか」

「そうされずにですか」

「ああされたと」

「そう仰るのですね」

「誤っているのならそう言うといい」

それについては何も言わないという関羽だった。

「そうな」

「いえ、そうは言いません」

「思いません」

関平も周倉もそれは強く言った。

「どうしてそう言いましょうか」

「将軍が正しいです」

「ならいいのだがな」

「では明日ですね」

「また明日」

「うむ、戦う」

実際にそうするというのがあった。彼は武人としてそうしたというのだった。

そしてだった。黄忠もだ。ここの周りの者達に言われていた。

「危ないところでしたな」

「もう少しで、です」

「やられていましたが」

「関羽、何故あそこで動かなかったのでしょうか」

「斬ろうと思えば斬れた」

黄忠ここの彼等に答えた。

「すぐにな」

「そうです。ですから危ないところでした」

「全く以て」

「だが、だ」

ここぞだ。黄忠は自ら言うのだった。

「悪い気はしない」  
「お命が助かったからこそ」  
「だからですか」  
「それで」  
「いや、それは違う」  
そうではないというのだった。彼はだ。  
「そうではない。そこに武人を見た」  
「関羽雲長は生粹の武人と聞いていますが」  
「それをですか」  
「御覧になられたと」  
「そうだ。わしも武に生きてきた」  
黄忠もだというのだ。彼自身もまた。  
「これまでな。関羽はそれを見せた」  
「ですが敵です」  
「倒さなければなりません」  
「それは何があっても」  
「わかっておる」  
それはだというのだ。しかしだった。

## 第四章

黄忠もまた武を見せようと決意したのだ。そしてであった。周りの者にだ。こう話すのだった。

「明日は弓を使う」

「弓をですか」

「黄忠殿が最も得意とされているそれを」

「それを使われますか」

彼は天下随一に弓の使い手と言われている。その腕に匹敵するのは曹操の腹心中の腹心である夏侯淵かも若くはかつて中原を暴れ回った呂布位しかいないと言われている。そこまで脳でなのだ。

「狙いは決して外さないという」

「ではそれで関羽を」

「倒されますか」

「一撃で」

「見ているのだ」

黄忠は沸き立つ彼等ににこりとませず述べた。

「わしの弓をな」

「わかりました。それでは」

「明日は楽しみにしています」

「黄忠殿の勝利を」

「是非共」

「うむ」

黄忠は頷きはした。そのうえで次の日の戦いを迎えるのだった。そしてであった。

その日の朝だった。両雄はまた向かい合った。黄忠は新しい馬に乗っている。その馬もまた黒馬だった。それに乗って関羽と向かうのだった。

そして関羽もまた赤兔馬に乗り黄忠と向かい合っている。その彼

が言つ。

「黄忠殿、それでは」

「うむ、今日こそはだ」

決着をつけると言い合つてだった。そのうえで互いにゆっくりと前に出る。

その中でだった。黄忠は弓矢を出してきた。それを見て関平と周倉が言つ。

「弓か」

「確か黄忠殿の弓は」

「そうだったな、天下随一の腕だ」

「関羽様は今弓を持ってはおらぬ」

彼とて弓は使える。しかし今は持っていないというのだ。

「そのうえで黄忠殿が弓を出されては」

「まずいな」

関平の言葉は危惧するものだった。

「これでは」

「お命すらも」

彼等の危惧はそのまま相手の期待だった。彼等はこぞつて言つ。

「これでだな」

「そうだな、勝つぞ」

「黄忠殿が勝たれる」

「間違いなく」

そのことを確信していた。彼等はだ。

黄忠は弓を構えた。いよいよだった。

関平と周倉はそれを見てだった。焦りを覚えていた。

「義父上が敗れる筈がないが」

「しかし黄忠殿の弓は」

「そうだ、恐ろしいものがある」

「油断はできません」

そのことを言つ。彼等は関羽を信じているがそれでもだった。危

ういものを感じていた。それをどうしようもできなくなっていた。

その間にも黄忠は弓を構えてだった。そしてだった。

弓が放たれた。関羽はそれをよけようもしない。二人はそれを見て驚きの声をあげる。

「馬鹿な、義父！」

「それでは」

こう叫ばずにいらなかった。しかし。

弓は関羽の顔のすぐ側を通っていった。そのうえで消えていく。

彼は弓が自分には当たらないことを見切ってそれで動かなかったのだ。

## 第五章

そして弓が消えてから。彼は黄忠に問うのだった。

「何故でござるか」

「今の弓を外したことですな」

「左様、貴殿の腕ならそれがしを傷つけることができた  
仕留めることができなくともだというのだった。」

「そのうえで刃と刃の戦に入ることもできた筈。それを何故」

「昨日のことの返礼でござる」

それであると。黄忠は話すのだった。

「だからこそでござる」

「昨日の」

「左様、それがしは昨日落馬しましたな」

「確かに」

「しかし貴殿はその時それがしを討たなかった」

このことを話すのであった。

「それは何故でござるか」

「武人として相手の窮地を斬ることはしませぬ」

だからだとだ。関羽は言うのであった。

「だからこそでござる」

「それと同じことです。それがしもまた」

「武人として」

「貴殿に対して正々堂々と戦いたい」

こう関羽に告げる。

「その為でござる」

「では弓ではなく」

「はい。刃と刃で」

戦うというのだった。

「それで如何でござろう」

「わかり申した。それならば」  
「今より」

両者は互いに得物を握り構えた。そうしてであった。  
再び激しい一騎打ちに入る。これが彼等であった。

この長沙での戦いの後黄忠は劉備の下に入り彼の将として活躍することになる。その位は関羽と同列であった。何故加わり日の浅い彼がそこまで取り立てられたのか。心ある者はこう言うのだった。

「それだけの方だからだ」

「だからこそ」

「そこま で な っ た」

「そ う い う こ と か」

「その通りだ。関羽は見事だが」

彼はまず関羽を讃えた。

「黄忠もまた見事」

「その武人としての心がか」

「立派なのだな」

「そ う い う こ と だ。 武 人 は か く あ る べ し」

彼は言った。

「あの二人はそれを示したということだ」

中国の三国時代にある話だ。武人の心はこの時代にあつたものだが今もその心は知られている。関羽も黄忠も最早この世にはいない。しかしその示したものは残っている。そのことは間違いない。願わくばこの心が何時までも人にあらんことをと思うのは人として当然のことであろう。

正々堂々と 完



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2208s/>

---

正々堂々と

2011年4月4日21時55分発行